

初診時の両親の申告は、1才の時先天性胆道閉鎖症で手術を受けた、であったが、上部消化管透視、内視鏡 ERCP などにより上記と診断し昭和58年7月14日、胆嚢・総胆管切除、総肝管空腸吻合 (Roux en Y) を施行した。術後膵液嚢を合併したが約1年後、瘻孔・空腸吻合により治癒せしめた。

34) 再手術を要した小児先天性胆道拡張症 3例 (嚢腫腸管吻合術施行例) の検討

内藤万砂文・岩淵 真  
 広田 雅行・内藤 真一 (新潟大学小児外科)  
 松田由紀夫・八木 実

先天性胆道拡張症はひろい年齢層にみられる疾患であるが発癌性、膵管胆管合流異常等の問題もありその術式には変遷がみられた。当院において本症小児例を昭和30年より37例経験した。昭和47年以後は全例に嚢腫摘除術が行われたが、初期の16症例に対しては嚢腫腸管吻合術が行われ、そのうち3例が再手術をうけ嚢腫摘除、肝管腸管吻合が行われた。この3例を呈示する。症例の概略は以下の通りである。

症例1: 16才女子。初発は腹部腫瘍で生後5ヶ月で初回手術。15年後に腹痛、発熱のため再手術となる。

症例2: 15才女子。初発は黄疸、灰白色便で生後3ヶ月に初回手術。15年後に腹痛、発熱のため再手術となる。

症例3: 10才女子。初発は腹痛、腹部腫瘍で10才で初回手術。1ヶ月後に発熱のため再手術となる。

35) 胆道拡張のない胆管・膵管合流異常を合併した胆嚢癌の1切除例

斎藤 六温・坪野 俊広 (刈羽郡総合病院)  
 関矢 忠愛・植木 光衛 (外科)  
 本間 保 (同 内科)

当科における過去5年間の胆嚢癌手術症例は20例であり男女比は1:3、平均年齢は71才(43~83才)と他の報告と同様であった。切除例は10例(50%)で術前正診率は60%であり誤診例は胆石症・胆嚢炎の診断であった。切除例中無石は1例のみであった。20例の胆嚢癌症例中、胆管膵管合流異常併発は1例であった。症例は62才女性。主訴は心高部・背部痛であった。胆道拡張を併わない。共通管が3.5cmの複雑な合流異常を合併した胆嚢癌の術前診断で肝床部楔状切除併施の胆嚢摘出術・リンパ節郭清(R<sub>2</sub>)を行った。術中胆管内及び胆嚢内胆汁アミラーゼ値は各々107460uと4110uと高値であった。胆嚢内には小さなビ系石があり癌腫の肉眼型は結節型(3.0

×2.0×2.0cm)組織型は乳頭腺癌と管状腺癌が混じていた。術後1年2ヶ月の現在再発の徴候なく健在である。胆道拡張を併わない合流異常は初発症状が胆嚢癌によるものが多く切除例は少ない。合流異常例は注意深い経過観察が必要である。

36) 胆嚢癌症例の検討

滝井 康公・福田 稔 (白根健生病院)  
 広田 正樹 (外科)

昭和55年~昭和60年の6年間に、当白根健生病院において経験した胆嚢癌症例は23例であったので報告します。その内分けを見ると、男性4例、女性19例と女性に多く、男女とも60歳代にピークがあり、平均年齢は68.3歳でした。

Stage別では、Stage I 11例(7例)、Stage II 5例(2例)、Stage III 3例(1例)、Stage IV 4例(0例)、(カッコ内生存例)生存例は、23例中10例で、43%の生存率であった。また、胆石保有例は、23例中13例、不明3例を除き、65%の保有率でした。

その他、これらの症例につき、文献的考察を加え、報告します。

37) 当科における胆嚢癌手術例の検討

斎藤 英樹・丸田 有吉 (新潟市民病院)  
 藍沢 修・桑山 哲治 (第一外科)  
 山本 睦生・若佐 理

過去約12年間に当科において手術を行った胆嚢癌68例について検討し以下の結果を得た。

(1) 60才台が22例と最も多く、男女比は1:3.2で女性に多かった。切除例の胆石合併率は70%で、そのうちコレステロール胆石が79%を占めていた。

(2) 超音波診断装置を使用してから治癒切除例が飛躍的に増加した。

(3) 胆嚢癌取扱い規約に従って肉眼的進行度を分類すると、Stage I が10例、Stage II が4例、Stage III が9例、Stage IV が45例であった。

(4) Stage I の5年生存率は87.5%であったが、Stage II, III, IVでは5年以上の生存はなく、3年生存率はそれぞれ33.3%, 12.5%, 2.6%であった。

(5) 切除例は40例、切除率は59%で、そのうち治癒切除例は21例、治癒切除率は52.5%であった。

(6) 治癒切除例の5年生存率は45%であったが、非治癒切除例では3年以上の生存はなく、3年生存率は10.5%であった。

(7) リンパ節転移と壁深達度は予後と密接に関係し、